

受験英語のネックに関する 研究要約レポート

読み込めなかった研究 PDF の要点を、
NotebookLM に入れやすい形で整理した要約版

この PDF で分かること

- ・受験生が英語で詰まりやすい点は、単語不足だけではなく「構造把握」「文脈内で知識を使う力」「要約・抽象化」にある。
- ・入試は授業や学習行動に影響するが、その影響は単純ではなく、学校文化・教師・教材・学習観も大きい。
- ・生徒側からは、標準テスト偏重とスピーキング不足への不満が強い。
- ・現在の共通テストは、発音や語句整序を単独で問うよりも、読む・聞く場面で知識を活用させる方向へ寄っている。

作成日: 2026-04-15

対象: 東大英語や大学受験英語の発信準備用

1. 総合結論 - 受験生が英語でつまづく主因

- 最大のネックは「単語が足りない」ことだけではなく、文の骨組みを取る力、文脈の中で文法・語彙を使う力、そして内容を抽象化してまとめる力の不足である。
- 大学入試は高校の授業や勉強法に影響するが、その影響は一方向ではない。教師の力量、教材、学校文化、生徒や保護者の期待も強く作用する。
- 学習者の実感としては、標準テスト偏重、話す練習の不足、教師やカリキュラムへの不満が残っており、制度改革が教室実践まで十分届いていない。
- 共通テストは、発音・アクセント・語句整序のような知識単体の設問を減らし、読む・聞く場面で知識を運用させる方向へ設計されている。

2. 研究ごとの要約

2-1. Paxton, Yamazaki, Kunert (2022) - Japanese University English Language Entrance Exams and the Washback Effect: A Systematic Review of the Research

何を扱った資料か

- 1993年から2022年6月までの実証研究を系統的に見直し、日本の大学入試英語が授業・学習行動にどのようなwashbackを与えてきたかを整理したレビュー。

要点

- 入試が高校英語に強い影響を与えるという語りは広く共有されているが、実際の影響はかなり複雑で、単純に「入試のせい」とは言い切れない。
- 研究は大きく、学習者行動、教師行動、情意面、リスニング導入後の影響の4群に整理できる。
- 既存研究だけでは十分でなく、4技能化、とくにスピーキング導入が今後どのような影響を与えるかは、さらに実証研究が必要だと結論づける。

受験生向けに言い換えると

- 受験生の弱点を語るときは、「単語が足りない」で終わらず、入試が促す学習行動と、実際に必要な運用力のズレをセットで語るのが有効。

出典

Paxton, Yamazaki, Kunert (2022) - Japanese University English Language Entrance Exams and the Washback Effect: A Systematic Review of the Research
本文アクセス可。ERIC PDF。

2-2. Mulvey (1999) - A Myth of Influence: Japanese University Entrance Exams and Their Effect on Junior and Senior High School Reading Pedagogy

何を扱った資料か

- 大学入試が中高の読解指導をどれほど規定しているのかを批判的に検討した論文。

要点

- 著者は、大学入試のwashbackが過大評価されていると主張する。

- 現在の不十分な読解指導は、入試内容だけでは説明できず、他の制度的・文化的・教育的要因も大きい。
- つまり、「試験が悪いから授業も悪い」という単線的理解では現場の実態を捉えきれない。

受験生向けに言い換えると

- 発信では、入試批判だけでなく、「学校で何が起きているのか」「なぜ読み方が育たないのか」を分けて説明した方が説得力が増す。

出典

Mulvey (1999) - A Myth of Influence: Japanese University Entrance Exams and Their Effect on Junior and Senior High School Reading Pedagogy
本文アクセス可。JALT Journal PDF。

2-3. Saito (2019) - Impacts of Introducing Four-Skill English Tests into University Entrance Examinations

何を扱った資料か

- 外部4技能試験導入の背景、期待される positive washback、そして導入時の懸念をまとめた論考。

要点

- 当時のセンター試験は主に reading と listening を測っており、4技能試験導入の狙いは、授業をより communicative に変えることだった。
- ただし、4技能化を入れれば自動的に授業が変わるわけではなく、制度設計や実施上の懸念に対応しないと効果は薄い。
- 入試改革は「測る技能の拡張」だけでなく、学校側が本当に運用可能かどうかまで見ないと空回りしやすい。

受験生向けに言い換えると

- 受験生向け発信では、4技能化を単なる制度ニュースとして扱うより、「結局、教室で何が変わるのか」に落とし込むと理解されやすい。

出典

Saito (2019) - Impacts of Introducing Four-Skill English Tests into University Entrance Examinations
本文アクセス可。The Language Teacher PDF。

2-4. Nakanishi (2024) - Challenges in English Education at School in Japan: Cross-sectional Study of Student Perspectives

何を扱った資料か

- 大学生に過去の学校英語経験を尋ねた mixed-method 研究で、生徒視点から英語教育の課題を掘り出したもの。

要点

- 学生が挙げた主要課題は、標準テスト偏重、話す練習の不足、教師の力量への不信、ネイティブ教員不足、カリキュラム不満だった。

- MEXT が理論上は改善を進めていても、生徒の実感としては「教室はあまり変わっていない」と受け止められている。
- 特に speaking の機会不足への不満が強く、実際にはもっと話す練習をしたいという声が目立つ。

受験生向けに言い換えると

- 受験生向け動画では、「話す練習不足」はそのまま「読む・書くにも影響する運用力不足」につながると説明すると刺さりやすい。

出典

Nakanishi (2024) - Challenges in English Education at School in Japan: Cross-sectional Study of Student Perspectives

本文アクセス可。2024 年 PDF。

2-5. Brennan (web paper) - University English Entrance Examinations in Japan

何を扱った資料か

- Brown & Yamashita と Kikuchi などの先行研究を踏まえ、日本の大学入試英語の問題点と改善の方向性を整理したレビュー的論文。

要点

- 10 年以上たっても、上位大学の英語入試は大きく変わっていないという整理が示される。
- 読解文の難しさは依然として高く、私大は多肢選択、公立・国立系は翻訳問題に寄る傾向がある。
- 試験設計の基準が弱いと、学力だけでなく juku 的な test-wiseness が得点を左右しやすい。

受験生向けに言い換えると

- 東大英語の発信では、「難しい単語」よりも「どの形式で何を処理させている試験か」に注目させると、勉強の向き先を示しやすい。

出典

Brennan (web paper) - University English Entrance Examinations in Japan

原 PDF ではなく、アクセス可能な Academia 掲載本文の要約部を参照。

2-6. 大学入試センター / MEXT (2021) - 令和 3 年度大学入学共通テスト「英語」について

何を扱った資料か

- 研究論文ではないが、現在の共通テスト英語が何を問うように設計されているかを理解するための一次資料。

要点

- 発音・アクセント・語句整序などを単独で問うのではなく、読むこと・聞くことの中で知識を活用できるかを見る方針が明示されている。
- 出題は、実際のコミュニケーションを想定した目的・場面・状況を重視し、概要把握や必要情報の読み取りをねらう。
- 一方で、大規模 high-stakes 試験として speaking や writing を直ちに実装するには実務上の課題があることも認めている。

受験生向けに言い換えると

- 現在の受験英語は、知識暗記を完全に捨てたわけではないが、「知識を文脈で使えるか」に軸足を移している。受験生のネックもここに出やすい。

出典

大学入試センター / MEXT (2021) - 令和3年度大学入学共通テスト「英語」について
研究論文ではないが、現行設計を理解する補助資料として収録。

3. この研究群から見える「本当のネック」

- 単語不足だけではない。英語の知識を文脈の中で使う力が弱いと、長文・和訳・要約・英作文が全部不安定になる。
- 読解では、名詞を追うより「主語 - 動詞 - 修飾」の骨格を取る力が重要になる。これは、知識問題から運用問題へ寄る近年の試験設計とも一致する。
- 要約や記述では、具体例を並べるだけでは得点になりにくい。抽象化して筆者の主張をつかむ力が必要になる。
- 受験生自身は speaking の不足を強く感じているが、これは単に話せないという話ではなく、英語を「意味のある単位」で扱う経験不足を示している。
- したがって、発信テーマとして最も強いのは「受験英語の失点原因は、単語不足より構造把握と運用力不足である」という軸である。

4. TikTok / YouTube で発信するときの使い方

- 主張の軸: 「英語ができない人は単語で止まっている。合格者は構造と論理で読んでいる。」
- 動画テーマ例: 「和訳で点が来ないのは単語不足ではない」「要約で落ちる人は具体例を書きすぎる」「共通テストが問っているのは知識の暗記ではなく知識の運用」
- PDF 配布テーマ例: 「東大英語で落ちる人の3大ミス」「長文で動詞を見失う人へ」「要約で具体例を削れ」

5. 参考文献・参照資料

- Paxton, S., Yamazaki, T., & Kunert, H. (2022). Japanese university English language entrance exams and the washback effect: A systematic review of the research.
- Mulvey, B. (1999). A Myth of Influence: Japanese University Entrance Exams and Their Effect on Junior and Senior High School Reading Pedagogy.
- Saito, Y. (2019). Impacts of Introducing Four-Skill English Tests into University Entrance Examinations.
- Nakanishi, J. R. (2024). Challenges in English Education at School in Japan: Cross-sectional Study of Student Perspectives.
- Brennan, J. T. University English Entrance Examinations in Japan. (web text access)
- 大学入試センター / 文部科学省 (2021). 令和3年度大学入学共通テスト「英語」について。

注: 一部は元 PDF ではなく、アクセス可能な本文・要約・公開ページから要点を確認して整理した。政策資料は研究論文ではないが、現行試験設計の理解に必要な補助資料として含めた。